

実践報告

台北日本人学校NIE実践2017

—多文化共生教育のための試み—

神部 秀一¹⁾・石田 成人²⁾・所澤 潤³⁾Newspaper in Education Practice in the Taipei Japanese School in 2017:
Trial for Multi-Cultural EducationShuichi Kambe¹⁾, Narito Ishida²⁾ and Jun Shozawa³⁾

要約

本稿は、2017年9月7日・8日に台北日本人学校中学部の7学級で実施したNIE授業の内容とその成果を報告するものである。本実践の目的は、海外日本人学校の生徒に、異文化環境の中にいることを実感させる授業をNIEによって実現する可能性を探ることにあつた。授業は、社会科で、テーマは「成人年齢を考えるー成人年齢は18歳か20歳かー」とした。生徒に、日本と台湾の成人年齢について考えさせ、それを台湾という地と結びつけて把握できるようにすることを意図した。本NIE授業は、対等の立場にある二人の教師がティーム・ティーチング(TT)で行うスタイルをとり、石田と神部が授業を担当し、所澤がスーパーバイザーとなった。石田が成人年齢20歳支持、神部が18歳支持の立場でそれぞれの利害得失についてディベートを展開し、生徒に考えを促し、最後にゲストティーチャーとして現地の大学教員を迎え、台湾の成人事情について説明を行った。授業後のアンケート調査では、生徒の多文化共生意識の向上、社会参加意識の向上をみることができた。

キーワード：台北日本人学校、成人年齢、TT授業、NIE、多文化共生

1 はじめに

本稿は、2017年9月7日(木)・8日(金)に実施した台北日本人学校中学部でのNIE(教育に新聞を)実践について、その内容を報告するものである。

本実践の目的は、多文化共生下の日本人学校で、NIEの導入や現地教員(ゲストティーチャー)の活用によって、生徒が異文化と共生すべき環境にいることを実感できる授業を実施できるか否かを探るこ

とにあつた。

まず、海外日本人学校に着目した理由を述べる。

執筆者の一人所澤は、1990年代より外国籍児童生徒の教育に関する研究を進め、その一環で多文化共生教育実践の開発、特に日本語教室における授業の充実の問題に取り組んできた⁽¹⁾。本稿で報告する台北日本人学校での実践もまた多文化共生に関する実践を開発しようとする試みの一つである。

海外日本人学校に在籍する児童生徒は、多文化

1) 神部 秀一 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

sk55skk@yahoo.co.jp

2) 石田 成人 東京未来大学モチベーション行動科学部非常勤講師 (Tokyo Future University)

yishida@flute.ocn.ne.jp

3) 所澤 潤 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

jbc01132@nifty.com

共生環境下で生活している。学校や家庭では日本語で生活しているが、戸外に出ればその国の言語に頻繁に接する。しかし、海外日本人学校は日本の学習指導要領を忠実に実施するため、必ずしも所在地の環境を活用した実践を行わなければならないわけではない。

本実践はそのような背景の下に行われている。

2016年7月、所澤と神部は東呉大学専任講師長田正民氏の紹介で台北日本人学校に赴き、当時の校長重山史朗氏から同校での授業実践の内諾を得た。2017年7月の事前打ち合わせで、授業内容を中学校社会科「18歳成人について考える」と決定し、9月7日・8日の2日間で中学部の全7クラスで授業を実施することとなった。

2 台北日本人学校

台北日本人学校は、台湾現地では台北市日僑學校という名称で私立学校として認可されており、台北市士林区中山北路6段785号にある。現地は、天母（日本語読みは「てんぼ」と呼ばれる地域で、日本人が多く住んでおり、また中山北路をはさんで向かい側には、アメリカンスクールが設置されている。設立は、1947（昭和22）年の温州街台湾大学の独身宿舎における「国立台湾大学附設台日籍人員教育班」開校に遡り⁽²⁾、世界の日本人学校の中でも、比較的歴史の古い学校である。

我々が授業を実施した2017（平成29）年度の学級数は、小学部20学級、中学部7学級、特別支援学級1学級、合計28学級で、教職員数は、文部科学省派遣教員、現地採用教員、事務、用務、警備員等の職員で合計約70名であった。

3 授業の特色

構想した授業はNIEと多文化共生教育という2つの面の特色をもち、それは以下に述べるティーム・ティーチング（TT）の授業スタイル、テーマの選定、台湾人大学教員の参加という3点に現れている。3点ともNIE実践であるが、2点目と3点目は多文化

共生にも深く関わるものである。なお3名のNIEの経験を述べれば、石田は群馬県板倉町立北小学校校長を務めた2009年から2011年にかけて、神部は群馬県太田市立強戸中学校教諭の2010年から2012年にかけて、NIE実践に取り組んだ経験があり、また所澤は、2007年から2013年にかけて群馬県NIE推進協議会会長を務めていた。

3.1 教師2人が対等関係のTT授業について

授業は教師2人が対等の関係のTTのスタイルで行った。この実践は、所澤の立案で企画し、所澤のスーパーバイズの下で石田と神部が実践したものである。そのTTスタイルNIEについては、すでに神部が群馬県での試行の経験を紹介している⁽³⁾が、モデルの形で示せば次の通りである。

その時々で話題となる「東京オリンピック光と影」「原発問題を考える」のような世論を二分する問題を扱い、次の①～⑤の順に展開する。

- ① T1・T2の二人の教師が、対立する立場に立つナビゲーターとなって、それぞれの主張とその根拠を紹介する。その際、新聞等の資料を利用する。
- ② 児童生徒は、二人の教師から考える素材を得て、いずれかの立場を選択し理由を発表する。
- ③ T1はS1（T1に賛成する児童生徒）を励まし、S2（T2に賛成する児童生徒）に議論を仕掛ける。逆も行う。
- ④ S1とS2を議論させる。
- ⑤ 再度いずれか立場を選択させ、理由を発表させる。

このTT授業の特長は、次の3点である。

- ① 社会的テーマを扱うことができる。難しい内容を扱える。
- ② 児童生徒は、どちらかの立場を選択するので、全員参加型の授業となる。
- ③ 一つの立場を一人の教師がとるため、児童生徒にとって理解しやすい。

3.2 テーマ「18歳成人」に関して

今回の授業テーマ「18歳成人」は、これからの日

本をどのような国にしていくかという問題を中学生に提起するものであり、台北日本人学校の社会科教員と相談して決めたものであった。この成人年齢の20歳から18歳への引き下げについては、授業の1年近く後の2018年6月13日に参院本議会で可決され、2022年4月1日からの実施が決定された。また、選挙年齢の18歳への引き下げは、すでに2015年6月の公職選挙法が改正されて実施され、授業の1年以上前の2016年6月には、18歳・19歳の新たな有権者が加わった参議院選挙が実施されていた。

「18歳成人」は、選挙権の他に飲酒喫煙・婚姻・公営ギャンブル・少年法等の話題が考えられるため、生徒に切迫した話題であったともいえる。但し、少年法の問題は、近年の凄惨な事件を想起させることが予想され、かつ、生徒の出身地域とも関係すると考えられるため、扱わないこととした。

このテーマは、台湾社会の日本と異なる側面を理解するためにも必要なものであり、多文化共生のテーマにふさわしいと判断した。後に述べるが、台湾人大学教員による説明にあるとおり、台湾では選挙権が20歳であり、日本と異なっているからである。

3.3 現地大学教員の参加に関して

本実践では、日本人教員のみで台湾の事情を説明するのでは、リアリティに欠けると判断し、現地の台湾人大学教員をゲストティーチャーとして迎えることにした。9月7日は国立政治大学李衣雲副教授、8日は国立台北大学張惠東助理教授を迎えた。二人は、台湾出身で日本留学の経験があり、現在台湾に在住し、台北市にある国立大学に勤務している。台湾の成人事情を熟知しているため、二人にそれぞれの視点から、台湾の成人事情について中学生に授業の中で解説することを依頼した。

4 授業の実際

石田と神部は、所澤がスーパーバイザーの立場で参加している下で2017年9月7日と8日に、台北日本人学校中学部の全7学級でNIE授業を実施した。授業のテーマは「成人年齢を考える－成人年齢は18

歳か20歳か－」（社会科）とした。石田が成人年齢20歳支持、神部が18歳支持の立場に立ち、それぞれの利害得失を紹介し、生徒に考えを促し、最後にゲストティーチャーの国立政治大学李衣雲副教授（7日）、国立台北大学張惠東助理教授（8日）が、台湾の成人事情について解説した。

授業の内容は、ゲストティーチャーの部分以外は、両日ともほぼ同様のものであったので、それぞれの共通する部分を紹介し、ゲストティーチャーの部分のみ、分けて述べることにする。

4.1 授業の概要

【実施日時】

2017年9月7日（木）・8日（金）の午前中

【実施校・対象】

台北日本人学校・中学部7クラス

7日 2校時：1年A組、3校時：2年A組

4校時：1年C組

8日 1校時：3年B組、2校時：2年B組

3校時：1年B組、4校時：3年A組

【授業者】

◆石田成人 ◇神部秀一（7日・8日）

（以下、石田に◆印、神部に◇印を付ける）

李衣雲国立政治大学副教授（7日）

張惠東国立台北大学助理教授（8日）

【学習目標】

18歳選挙権・飲酒喫煙・婚姻・ギャンブル等の事例を通して、成人年齢について、自ら幅広く、深く考えることができる。

【準備】

下記①～④の新聞記事やネット記事を、掲示用資料として、それぞれ約90cm×110cmに拡大したものを用意した。

◇神部の使用した資料

①「10代の『民意』どこに 70年ぶりの参政権拡大」（日経2016.6.17）

②ネット記事「18歳から選挙権 世界の選挙権」（<http://senkyo18.jp/study/world.html>）⁽⁴⁾

◆石田の使用した資料

- ③「一票18歳から 70年ぶりに引き下げ 来夏
参院選から」(朝日2015.6.18)
- ④「『18歳選挙権』4日に衆院通過 残る『二重
基準』どう解消」(産経2015.6.1)

【役割】

◆石田成人 (20歳支持)

◇神部秀一 (18歳支持)

台湾現地大学教員 (台湾の成人事情等の説明)

4.2 授業の展開

(1) 18歳選挙権について考える。(約10分)

◇◆神部・石田の2人の教員から、18歳支持の立場
と20歳支持の立場で、選挙権についての話題を提
示する。

◇神部が、18歳選挙権支持の意見を述べる。

- ・世界の潮流。世界の9割以上が18歳までに選挙権
を与えている。
- ・10代の民意。国政に若者の声が届いていない。20
代の投票率がいつも最低。もっと若者の声を。

◆石田が、18歳選挙権支持に反対し、20歳支持の
意見を述べる。

- ・17・18歳は、高校3年生であり、同じクラスの中で、
選挙に行く人か行かない人が出てくる。受験期の高
校3年に、選挙は難しい。
- ・成人は20歳である。ダブルスタンダードでいいの
だろうか。若い人向けの施策とは何?

(2) 自分の考えを整理し、どちらの立場に考えが近
いか、判断する。(約10分)

発問「2016年の参議院選挙から、日本では18歳
選挙が始まりましたが、2人の話を聞いて、18歳選
挙権で良かったと思う人はA、ちょっと早かったと
思う人はB。AかBか、どちらかを選んで下さい」

- ・人数を確認する。
- ・選挙権の問題は、すでに決まったことなので、何
人かに意見を求めるに止めて、次の話題に進む。

(3) 18歳成人について、2人の教員が説明する。(約
10分)

◆◇石田・神部が、「婚姻・公営ギャンブル・飲酒
喫煙」等について、20歳支持の立場と18歳支持の

立場で意見を戦わせる。

・◆石田は、成人年齢として20歳支持の立場。◇神
部は、18歳選挙同様に他のものも18歳に下げると
いう立場に立つ。

・「自己責任」「社会的責任」「大人としての自覚」が
「成人」の基準となる。その是非について、生徒に
考えを促す。

・適宜生徒からの意見も聞きながら、話を進める。
生徒からは、次のような意見が出された。

S1: 僕は18歳派です。18歳に選挙権があっても、
強制ではないので、受験に集中したい生徒は集中
すればいい。お酒とかは、自分の問題なので自己
責任でOKだと思います。

S2: 20歳派です。お酒とかは、まだ18歳だと常識
が分かってないので、飲み過ぎて暴力事件とか起
こすかもしれないし、たばこは18歳から吸うと、
平均寿命が下がるかもしれない。

S3: 20歳派です。18歳から投票したりして、一人
一人の意見聞くのも良いけれど、その年は受験が
あるので20歳派です。18歳は勉強に集中し、選挙
は20歳になってからで良いと考えます。

(4) 班ごとに、18歳成人について賛成か反対か意
見を交換しあう。各自、その理由を考えて発表
する。(約10分)

・18歳成人について、賛成か反対か、判断し、理由
を述べさせる。

・4人(～5人)グループになって、話し合わせる。



図1 石田・神部のTT授業

班の代表から、どのような話が出たか、報告させる。

以下に、1年生の例を紹介する。併せて、教師がどのように介入しているか、具体例を示す。

【1年生】18歳支持：8人、20歳支持：19人

S1：僕たちの班では、18歳に賛成が2人、20歳に賛成が2人、もう一人は19歳でした。20歳派は、高校生ではまだ早いという理由です。18歳派は、自覚を持てれば大丈夫という理由でした。19歳派は、受験もないし、高校生活もないし、一番良いということでした。

S2：私たちは、18歳賛成が1人、20歳賛成が4人でした。18歳でも、世の中のことを考えられる人もいます。でも、高校生だから、まだ早いのではないかという意見でした。

S3：18歳が2人、20歳が3人でした。18歳派は、若者からどんどん意見をもらおう。若者が日本を動かさなければいけない。20歳派は、昔と違って大学に行く人が多いので、ちゃんと成人(20歳)になってからの方がいい。

S4：20歳派は、成人式は20歳だから。そのときに自分が大人になったという自覚がもてるから。18歳派は、これから世界を動かすのは若者だから。

S5：全員20歳でした。18歳から20歳までに、どれだけ経験を積むか。その2年間の過ごし方が大事です。経験を積んで、20歳がいい。

◆石田：「今、過ごし方が大事」とありましたが、どんな風に過ごすのですか。

S5：大学には、自由があります。そこで、その自由の中で責任をもって過ごしたい。世の中や社会の勉強をします。

◇神部：あんまり変わらないと思いますよ。18歳で「自己責任」を早く与えた方が、皆さんが早く大人になりますよ。

◆石田：無責任ですね。例えば、車の免許を取りました。車を運転しました。事故を起こしました。大きな事故です。「自己責任」ということで、自分で責任がとれますか。

このように、生徒の意見を聞き、生徒の言葉に反応して、石田と神部がそれぞれの20歳支持、18歳支持の立場で意見を交換していった。収束はさせず、オープンエンドとした。

(5) 台湾における18歳成人に関する説明を聞く。(約10分)

・李氏(7日)、張氏(8日)が、台湾の18歳事情について、パワーポイントを用いながら説明した。説明の内容は次節で紹介する。

5 現地教員(ゲストティーチャー)の講和の内容

李衣雲、張惠東両氏が、講話で台湾の成人事情として共通に挙げたのは、選挙権、婚姻制度、兵役制度であった。

選挙権は、日本では18歳に引き下げられたが、台湾では現在20歳であり、選挙権年齢の18歳への引き下げを求める運動を若者らが展開していることを、「ひまわり学生運動(2014年3月18日、立法院(日本の国会議事堂にあたる)を占拠した学生運動から始まった社会運動)」を例にして、解説した。

まず、李氏(7日)の講話を掲げる。兵役や選挙権の話と共に、自身の異文化体験の話も交えた。

「台湾では16歳になり、仕事をすると税金を納める義務が発生します。18歳では、刑事の責任をとらなければならないし、男性には兵役という義務もあります。兵役は、以前は2年間、今は1年6月～7月くらい兵役に就くのです。こうした義務を負っているのに、権利はどうでしょう。選挙権は、20歳にしなければ得られないのです。投票の権利については、今、台湾でもめています。スライド写真は、学生が抗議する場面です。税金を払わなければならないのに、自分の考えを生かす政治家に投票出来ない。そのことに若者は不満を感じているのです。選挙権ですが、1票を投じれば終わりですか。選挙権は、投票の時期だけではありません。新聞などで今の政治の様子を知ることや、政治家を監督する必要

があります。選挙権の意味をよく考えましょう。』

続いて李氏は、台湾の紹介と日本での異文化体験を語った。

「ところで、台湾人の友達が10人以上いる人、どのくらいいますか（このクラスでは1人）。（スライドを見せて）日本の祭り台湾の祭りの違いはわかりますか。台湾では、爆竹を鳴らします。同じ事柄でも、違う表現形式になっています。日本の友達が来たら台湾のどこを紹介したいですか。お勧めの観光スポットはどこですか。台湾で一番おいしい物は何ですか。（写真を見せて）、ここは行ったことありますか。11月か12月のあまり暑くないときがお勧めです。台湾での文化ショックはありましたか。私が日本に留学したときのショックは、銭湯でした。みんなと一緒に風呂に入ります。私は、恥ずかしくて、絶対入りたくないと思いました。入浴後にお婆さんから声をかけられました。せめて洋服を着てから話をさ



図2 李衣雲氏の講話「台湾の成人事情」



図3 張惠東氏の講話「台湾の成人事情」

せてもらいたかった。（笑）」

次に、張氏(8日)の講話の内容は以下の通りであった。

「年齢は、結婚、運転、選挙、喫煙と深い関係があります。それから、兵役。台湾では正当な理由がない限り、18歳となった男子は、『兵役法』により兵役義務が課せられます。日本にはない制度です。体力が最もピークの時期として兵役、軍隊に入ります。朝5時に起きて夜10時まで、体力訓練、軍事訓練を行います。私は、2年間（今は1年間。兵役期間は、短縮傾向にある）。いつまであるか知っていますか。36歳まで兵役の対象です。

行為・能力をもつのは何歳が相応しいですか。18歳か20歳か、立法者が考えます。（スライドを見せて）「ひまわり学生運動」というのがありました。政府の方針に反対して、高校生と大学生が立法院を占拠した事件です。若者は、投票権がないので、こういう

表1 授業アンケート結果（5段階評定の平均得点）

項目内容	1年	2年	3年	全体
1. 18歳選挙について考えが深まった。	4.80	4.40	4.60	4.60
2. 18歳成人について考えが深まった。	4.80	4.40	4.50	4.57
3. 18歳成人について自分の考えがもてた。	4.70	4.56	4.45	4.59
4. 台湾の18歳成人についての様子が分かった。	4.32	3.77	4.08	4.07
5. 2人の教師が違う立場で説明すると、内容が理解しやすい。	4.89	4.47	4.55	4.68
6. 台湾の教員が加わったことで、内容に深まりが出た。	4.23	3.69	3.98	3.97
7. 新聞記事があったことで、リアリティが高まったと思う。	4.81	4.42	4.32	4.56
8. 今日の授業で、自分の考えが広がった、または、深まった。	4.84	4.40	4.50	4.60

調査人数 1年：77名、2年：55名、3年：40名、全172名

形で政府に抗議したのです。憲法改正、投票権を18歳に下げようように要求したのです。成人年齢は、台湾は20歳なのです。アメリカは18歳、オーストラリアは16歳です。イギリス18歳、キューバは16歳、韓国は19歳です。おのおのの国の状況や違いが分かります。皆さん自身は、何歳がよいと思いますか。考えてください」

6 結果と考察

6.1 授業アンケートの結果

生徒は、我々の授業をどのように受け止めたのだろうか。そのことを確認するため、授業後にアンケート調査を実施した。アンケートは、授業の各段階の理解度を確認する8項目と自由記述の3項目とを用意した。理解度確認の8項目は、5段階評定（5＝とてもそう思う～3＝どちらでもない～1＝全然そう思わない）とし、自分の気持ちに一番近い番号を選んでもらった。自由記述は、「最も印象に残ったこと」「現地教員の講話によって考えが深まったこと」「授業改善のアイデア」について尋ねた。1年生77名、2年生55名、3年生40名、計172名から回答を得た。その結果が表1～表4である。

表2 「最も印象に残ったこと」の主な意見

【18歳選挙権・成人年齢に関して】（/毎に、別の回答者）
日本が選挙権を18歳にしたことは世界の中でも遅いこと、世界の9割が18歳でも選挙ができるということ/16歳で投票できる国があることも知らなかった。世界へ視野が広がった/18歳、20歳の成人についてあまり考えたことがなかったので考えが深まった/18歳で選挙をできる国が90%以上あることに驚いた。日本は高齢化していて、若い人はあまり関心がないことが分かった/外国では16歳という驚きの年齢でした。今まで18歳選挙についてあまり知らなかった/Double Standard に関するところが一番印象に残っている/今まで自分には関係ないと思っていたが、意外と18歳の問題は自分に身近な問題なんだと感じ

た/若者の意見が反映されていなかったことで18歳も選挙権が手に入ったこと/2人の先生の意見を聞いて自分が18歳になるときにも考えようと思った/18歳選挙から成人・結婚へと話が続いていくことで全てのことが関わってくる/選挙は18歳なのに、たばこやお酒は20歳だということ/16歳つまり後2年で女子は結婚できること/年齢による責任ということを学んだ/実際選挙が行われ18歳の投票率があまりよくないということ/現在の選挙の状況そして今後の生活についてどうあるべきか、そしてこれから自分たちがどうしていくべきかを考えさせられる授業になった/18歳からの飲酒、たばこ、ギャンブルはオツケーかという話し合いが印象に残った/18歳でもいいと思ったが、お酒やタバコの例が出てくると少し迷ってしまった/20歳と18歳というたかが2歳の違いなのに、こんなに深刻な話だったとは思わなかった/18歳選挙権はいずれ私たちにも関係のある問題だということを知らされた/20歳成人と18歳選挙というダブルスタンダードの状況がよくわかった/結婚は、20歳に揃えるほうがいいという意見が良かった。私なりに自分の意見を持てたこと/18歳が受験期であるということ/賛成：若い人の意見を取り入れ斬新な意見を取り入れる。反対：日本の文化や若い人の忙しさを考える。自分の意見に迷ってしまいました。成人になると責任を自分で背負わなければならないことに気づいた。成人になるという言葉の意味を深く考えることができた/私は年齢を統一することに視点をおきました。国際的に例えば日本では18歳でタバコを吸っていいとなった場合、その人がどこか他の国でタバコを吸った時に20歳未満はダメなどと言われ捕まったりしても、捕まった人はなんでも思うからです/今までは選挙について考えたことがなかったけれど、今回の授業で選挙権を18歳にすることは若者にも政治について考えさせられることなどを学べた/18歳の人選挙に行きたくないのは、だるいからという理由に共感した/18歳からいろいろなことを認めてしまうと便利な反面、たくさんの危険が潜んでいるということがわかりました/車を

運転するには18歳だとまだ若いので事故になったら危ないし、親の責任も必要になってしまうことがわかった/僕自身は20歳で選挙権を得られる方を支持しますが、18歳側にも若者の民意が反映される等の利点があると気付いたところが印象に残りました/18歳で、選挙に出かけてもいいという人と、反対だという人がいることを知れた/自分で責任を取れるのかというのがすごく気になりました。成人というのがなんで20歳と昔から決められているのか知りたいです

【TT授業に関して】

二つの対立している意見を生で討論することによってより理解が深まった(多数)/18歳選挙に賛成と反対の二人の教師がいて、どちらにも正論があり、視点が広がった/二人の先生が真逆のことを言っていて面白かった/2人の教師が違う立場で話していると、どんどん考えが出てきて、とても考えが深まりました/2名の先生の討論で、途中から汚名着せあっていたのが面白かった/18歳の選挙権、男女の18歳と16歳での結婚について、2人の先生が違う立場で説明していたので、僕は本当はどっちがいいのかな?と考えることができました/2人の会話でどちらもすごく分かりやすく、どっちにも説得力があった。立場の理由を伝えていてそのわけが印象に残った/2人が論理的に説明して、18歳か20歳か判断するのが面白かった

【現地教員の講話に関して】

台湾と日本の選挙権の年齢が違うということ/台湾では日本と少し違う文化があるが、選挙については似ているところがあった/台湾の人には兵役があり、1年間もあると知ったこと/台湾の兵役について、1つのことに対して細かい分析がしてあったところ/台湾で「ひまわりの運動」があったことが印象的でした/台湾では18歳で税金をはらわなければいけないのに選挙権がないこと

【新聞の使用に関して】

2人の教師が新聞を使っていたことが印象的でした。普段の授業より詳しくあった/新聞を使って説明

するとわかりやすく、そして、しっかりとした理由を聞くことができました/新聞に大事なところを蛍光ペンでなぞっているところ/新聞記事なども取り上げ、数字も出していて、とても説得力があった/新聞があったことでわかりやすかった。先生の体験話もよかった/新聞記事によって同じ国の中でも様々な意見があること

【その他】

喫煙のことですごく驚きました。自分はたばこを吸ってる人の隣を通ると、吸ってる人をなぐりたくなるのですが、その理由は2次喫煙と3次喫煙です。自己責任と聞いた時は少しポケました。自己責任ではなく連帯責任です/異なる意見の方がいることで、いつもの授業より考えを深めることができました/普段考えないことを考えることができた/2030年に今世界にない仕事ができると聞いた時、正直ワクワクしました

表3 現地教員の講話によって考えが深まったこと

日本だけの視点ではなく、世界に目を向けることができました。今住んでいるところの現実味が増しました/各国を対比することの大切さを感じた。また、台湾(海外)に住んでいるという実感がわいた/今、自分たちのすんでいる国の政治などが分かって、より台湾を知った感じがします/台湾のことを知ることによって、日本と比べながら考えることが可能になったので、自分の考えがより深まったと思います/台湾の年齢ごとの仕組みと、文化の紹介などについて、台湾からの視点を知ることができた/台湾に兵役があることを初めて知った/男の人は軍隊に入らないといけなことにびっくりした/バドミントンのコーチが兵役に行くらしく、それについて詳しく知れた/台湾に兵役があるのにびっくりしました。また、行為能力ということについて勉強になりました/台湾の先生が台湾のことを話すから、より深まった気がする/現地の先生が来てくれたことで、台湾はどのよ

うな状況なのかよくわかった/台湾と日本、その他の国を比較して下さって、世界中に視野を広げられた。日本だけではなく台湾からの目線も知れた。/今、自分が住んでいる台湾の、選挙や成人について今まで考えたことがなかったので、そこの考えが深まりました/台湾の政治について深く知ることができて、こんな機会がまたあればいいなと思いました/日本の政治と同時に台湾の政治も分かった/台湾の国民の義務や文化について知ることができました。あと、日本の文化と台湾の文化を比べることで、自分の考えが深まりました/どの国も選挙の年齢などが違って面白い。なぜかについても話して欲しいと思う/日本人として考えるプラス台湾の人たちの意見、でいろんな見方で自分の考えがもてた/日本だけではなく他の国の視点からも政治をみてみると、なぜこの国はこう考えるのだろうかと思いました/日本と台湾の風習が違うことが改めてわかった/台湾は水着をきて温泉に入るという点/「権利」について考えが深まった/前、台湾でデモが起こり、なにについてデモをしているのかがわからなかったが、今日分かりました/国によって人々の考え方は違うことがわかった。しかし、若者が立ち上がろうとする意識は変わらないなと思った/日本以外の国の状況を知り、これからの日本をどうしていくかなどの考えが深まった/日本では政府の力で18歳に引き下げられたのに、台湾では学生の力で下げようとしていることに驚いた/台湾の政治面や年齢面があまり理解できていなかったなので、理解が深まった/同じアジアだけど、考え方が違う国々を比較し、どちらが正しいか正しくないかは関係なく、様々な立場や視点から考えることができました/兵役についても、私も関心があるので知識が増えました/国によって投票の年齢が違うのは知っていたけど、今住んでいる国を例として説明してもらってわかりやすかった/

表1のそれぞれの得点や、表2・表3の感想から、本授業は生徒に好意的に受け止められ、また、本授業の所期の目的である社会参加意識や多文化共生

意識もかなり高めることができたと考えている。なお、表1のみ意見の内容を分類して掲げてある。

表1～表3より、以下5点述べたい。

- ①授業を通して、成人年齢についての理解を深めることが出来たと考えられる。表1の項目1「18歳選挙について考えが深まった（全体：4.60）」、項目2「考えが深まった（同：4.57）」、項目3「自分の考えがもてた（同：4.59）」と高い評価を得たからである。また、「自分の考えが広がったり、深まったりした」という項目8の得点も、4.60（全体）であり、今回の授業で、日本の時事的な問題について、生徒の考えを深めさせることが出来たと考える。
- ②現地教員（ゲストティーチャー）の講話について尋ねた表1の項目4・6「台湾の18歳事情についての理解（4.07）」「台湾の教員の授業参加の効果（3.97）」は、相対的に得点が低かった。しかし、評価がほぼ4ということは、それなりの評価を得ているということである。「台湾の選挙の内容や法律の紹介をもっと詳しくしてほしいかった」等の生徒意見に見られるように、各教員の持ち時間が少なかったこと、また、「ひまわり学生運動」等やや難しい台湾事情が話されたことによって他の項目よりも得点が低くなったものと思われる。表3に見られる自由記述からは、「今住んでいるところの現実味が増した」「台湾に住んでいるという実感がわいた」「今、自分たちのすんでいる国の政治などが分かって、より台湾を知った感じがします」等々の感想を得ている。多文化共生の社会で生活しているという意識を高められたとあってよいだろう。
- ③表1の項目5「2人が違う立場で説明すると、内容が理解しやすい」の得点が4.68と最も高かった。この実践で行ったTTの方式は、18歳成人の内容を生徒に確実に伝えることができた判断できる。
- ④表1の項目7「新聞記事があったことで、リアリティが高まった」も、4.56という高得点であっ

た。表3には、「新聞記事なども取り上げ、数字も出していて、とても説得力があった」等の意見もあり、主張の根拠として、また、正確な資料としての新聞の価値を生徒が認めていることを改めて確認することが出来た。

- ⑤得点の傾向として、1年生の得点が最も高く、次いで3年生が高く、2年生の得点が一番低い傾向にあった。このことは、中学生の一般にいわれている学年特性と関係しているのかもしれない。1年生は、様々なことに興味を抱きやすく、3年生は、公民の学習をし、3つの学年の中では最も身近な問題として18歳成人を捉えることが出来たためであろう。

6.2 生徒による改善点の提案

「今日の授業を改善するためのアイデア」の回答は、表4の通りである。「台湾教員の話に通訳を」「新聞のコピーを」「生徒同士の話し合いを」「発表の時間を」等、現地教員の使い方、資料の扱い方、生徒の話し合いや発表時間の確保等の問題を指摘していた。

表4 授業改善のアイデア

台湾の教員が中国語で話し、通訳を用意する/台湾の先生の時に、日本人の先生が分かりやすくしてくれるとずっと深まった/台湾の選挙の内容や法律の紹介をもっと詳しくしてほしい/新聞社の報道の違いも比べて授業すれば、さらに理解が深まると思いました/新聞があるのはよかったけれど、文字が読めなかったので、大事なところを拡大したり、コピーして配ってくれたりするとよかった/コピーして配れば、新聞の内容に目を通して、もっと理解出来る/次があるなら2時間取ってほしい。台湾の先生の話をもっと聞けたし、2人の教師にもっと質問できたと思う/生徒同士の話し合いの時間がもっとほしいです/発表の回数を増やしてほしいです

7 考察とまとめ

本実践の目的は、NIEや現地教員を日本人学校の授業の中に組み込むことで、実際に生徒に、異文化環境の中にいることを実感できる授業を実践できるかを探ることにあつた。

本実践を通して、生徒は日本と異なる台湾社会を感じ取れたという意味で、成果があつたと評価してよいだろう。表1のアンケート項目4「台湾の18歳事情についての理解」、項目6「台湾の教員の授業参加の効果」の平均得点が、4.07と3.97で、「まあまあそう思う」という好意的な回答を得ているからである。また、表3で示された生徒の意見からも、多文化共生社会を実感している様子が確認できるからである。

この授業が社会科の枠とNIEとを結びつけて行われている点を踏まえれば、アンケート結果から、この授業が生徒の社会参加の促進に結びついた可能性が高いという点に注目しておきたい。表1の高得点や、表3の生徒の意見から、18歳選挙権や成人年齢に関して、自分の意見を持ち、考えを深めていることが読み取れるからである。

また、この実践では、日本の問題と対比して、台湾の事情を理解するという内容構成をとったが、台湾という視点を加え、台湾人学者から台湾の説明を受けたことで、自身が住む台湾への理解が深められただけでなく、日本の外にいるという意識がかき立てられ、それが却って、自分の帰属する日本という国家社会への意識を高めたのではないかと推測される。この点は日本人学校という在外教育施設が、日本国内にある通常の学校では持ち得ない教育を提供するという機能を持っていることを示している。

アンケートによる改善点の提案に基づいて、今回行った実践の課題についても触れておきたい。

1時間の中で、「18歳選挙・その他の成人年齢の問題」「T1・T2、S1・S2の議論」「現地教員の講話」という内容は、盛りだくさんであったと生徒から指摘されている。そのため生徒の発表や話し

の時間が十分確保出来なくなってしまった。現地の理解という点で、おそらく現地人大学教員等の参加は避けられないので、授業の時間配分をどのようにするかという問題が、大きく現れたといえよう。2時間続きの授業を行うなどのことも検討すべきである。新聞も予めコピーして配布するなど、授業の細部において改善の余地がかなりあったことも書き留めておきたい。

付 記

本実践は、平成28年度～平成31年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究B「異文化対応能力育成教育と外国人児童の就学促進 - 先進諸国の多文化的教室の現場から」（研究代表者所澤潤）（JSPS科研費JP16H03787）による研究の一部として実施したものである。

本稿は、主として神部が執筆し、所澤が修正補筆し、神部、石田、所澤の三者で内容の確認をしてみました。

謝 辞

本実践を行うに当たって、台北日本人学校の当時の校長重山史朗先生、同校教諭の渡辺裕史先生、高井桃子先生及び藤原淳史先生に大変お世話になりました。本実践の実現には、東呉大学専任講師長田正民氏、元台北日本人学校教師林寛宏氏、台北在住の阿部由理香氏のご尽力を頂きました。アンケートの集計に当たっては東京未来大学学生鈴木千秋さんの協力を得ました。ありがとうございました。

また、真剣に授業に参加して下さった同校中学部の生徒の皆様にも心から感謝申し上げます。

註

- (1) 所澤潤（編）「教職大学院生による授業の試み」平成18年～平成21年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書『来たるべき日系南米人児童生徒就学義務化に対応する教育条件整備と教員養成 研修の研究』（研究代表者所澤潤）（研究課題番号18330163）、2010、pp.319-339
- (2) 台北日本人学校『学校要覧』2016、p18に学校の沿革が記されている。以下、抜粋して示す。昭和22年（1947）の温州街台湾大学の独身宿舎における「国立台湾大学附設台日籍人員教育班」開校に遡る。昭和40年（1965）に中華民国日本大使館附属施設として「在中華民国日本国大使館附属台北日本人小学校」と改称した。さらに昭和43年（1968）に中学部を設置し「在中華民国日本国大使館附属台北日本人学校」と改称した。昭和47年（1972）、日本との国交が停止したため、大使館附属の形から台北市政府教育局より「私立台北市日僑學校」の名称で認可を受けた日僑協会（現在の台湾日本人会）設立の「台北日本人学校」となった。昭和58年（1983）、現在地に新校舎が完成し移転し、現在に至っている。
- (3) 神部秀一「NIEのためのティームティーチング授業の提案」『日本NIE学会誌』第11号、2016、pp.67-76
- (4) 「18歳から選挙権 世界の選挙権」<http://senkyo18.jp/study/world.html>（2018年09月15日）

2017年(平成29年)10月3日(火曜日)

東 京

「お酒は20歳からでいいと思う人？」と
の質問に一齐に手が挙がった=台北市で



日本人学校の中1男女24人 18歳選挙権などを学ぶ

拡大コピーした新聞記事
を黒板いっぱいには貼り、
授業が始まった。「分かり
ますね、選挙権は選挙で投
票する権利。日本は若い人
の声をもっと政治に反映
させようと昨年、二十歳か
ら十八歳に引き下げまし
た、オーストラリアでは十六
歳に下げたら、十六歳の
投票率が一番高かったとい
うことです。でも」と神
部教授は新聞のコピーを
指しながら「日本では昨年
の参院選の十八歳の投票率
は全体の平均より低い。投
票年齢を下げてよかったと
思う人は？」と問いかけ

た。
このクラスの生徒は中学
一年の男女二十四人。話が
少し難しいのか、生徒たち
の表情は少し硬い。神部教
授の問い掛けにポツリポツ
リと手が挙がる。数えると
十一人。「下げるのは早過
ぎたという人は？」。ここ
らは十三人。「政治のこと
はよく分からない」とい
う声ももれていた。
「成人式は知っています
ね。二十歳になると、大人
ですから、酒、タバコはの
めます。でも、選挙権は十
八歳なんだから、酒、タバ
コも十八歳でいいじゃない
かという声もあります。皆
さん、どう思います。二十
歳でいいという人は？」と
聞くとほとんど全員が挙
手。石田講師は「酒、タバ
コの害を聞かされているん
でしょうね。健全ですね」と
話した。

台北で新聞を使って授業

「こんにちは！今日は選挙権について話し合いますよー。台北市の台北
日本人学校で、東京未来大の神部秀一教授(本紙NIEコーディネーター)と石
田成人同大講師によるNIE(教育に新聞を)の授業が初めて行われた。

(台北・迫田勝敏)

【資料】東京新聞 2017年10月3日「台北で新聞を使って授業」

(かんべ しゅういち・いしだ なりと・
しよざわ じゅん)

【受理日 2018年10月9日】